

## 現代のパンドラの箱を開けて見る勇気はあるか？

118S011 稲原遼

簗木蓬生 『閉鎖病棟』 新潮社, 1997 年

あなたは、閉鎖病棟と聞いてどんな人が入院している印象を持っているだろうか。危険な人、何か悪いことをした人、怖い人、気持ちの悪い人。以上のような印象が頭に浮かんだ人もいないのではないだろうか。

しかし、実際は大きく異なり、入院している精神障害者のほとんどは、犯罪とは無縁で、ただ、病気の症状で苦しんでいて、症状がコントロールできないから閉鎖病棟に入院しているのである。

あなたや、あなたの家族であっても、精神疾患はだれでも罹患する可能性がある。しかし、精神疾患に対する世間の印象は、自分たちには無縁の話で、まるで他人事のように捉え、彼らを忌み嫌っているように思う。

この物語は、4人の登場人物である島崎由紀、梶木秀丸、昭八、チュウさんで、生い立ちや年齢が違う精神障害者である。4人それぞれの入院するまでの話が物語の前半部分で説明され、その後、由紀は精神科病院に通院し、秀丸と昭八とチュウさんは精神科病院に入院した。通院した病院が同じところであったことから4人は会うことになる。普通の人間なら、嫌気がさし、すぐにでも帰りたと思う状況ではあるが、その当時は、現在と異なり、病院が入院に積極的で退院することには消極的であったことと、家庭内での孤立や帰る場所がないことから、彼らは退院や社会復帰を諦めていた。しかし、境遇の異なる4人には交流があり、互いに、暗い過去から立ち直りかけていた。

ところが、収容患者で誰からも厄介者扱いされているヤクザの重宗が、ある日、由紀を強姦し、その場にいた昭八は非力であったため、写真におさめ、その情報を秀丸に伝える。日頃の行動に対する怒りと、大切な友人を傷つけられた恨みから、チュウさんが重宗を殺害しようとするが、それを察した、秀丸がチュウさんより先に重宗を殺害してしまう。秀丸が由紀の過去を自分と重ねていたことや、過去に、死刑執行から運よく生き残ったことにより、死刑を放免されたことで、自分は死刑になることはなく、大切な友人が罪人にならないように守ろうとしたこと、さらには、死に場所をずっと探していたことから至った犯行であった。

しかし、この殺人事件の時期から、担当医師が交代して、その医師が患者の意思を尊重する考えを持っていたことから、退院支援が活発になって、昭八とチュウさんが退院する。強姦事件後は、由紀が病院を訪れることがなくなっていたので、4人が会うことはなかった。

にもかかわらず、秀丸の勇気ある行動で、彼らは生きる希望を見出し、秀丸自身も彼らのおかげで生き続けることを決意する。

この物語は、精神障害者の現状を把握するだけでなく、私たちに生きることは何か、友達とは何かを問う作品である。今を生きる我々だからこそ、読んでほしい作品である。